



「みたまのふゆ」とは、私共が常に蒙りいただいている大神様の恩徳、加護、御神威を尊称した言葉です。人間は自分ひとりの力で生きてゐるのではなく、つねに「みたまのふゆ」をいただいで、生かされてゐるのです。

コロナの終熄を待つて

「まつり」の真の姿を復活！

皆々でともに祈り合ふ

密を避けませうと、この三年程は「まつり」も自粛々々で過ごしてきましたが、どうやら通常通りの行事も執行できる状況が見えてきました。是非、賑やかな「おまつり」を復活してゆきたいと存じます。ただし、この際「まつり」の本来の意味を考へ、正しい姿の「まつり」としていきたいものです。

私たちは「悪疫退散」を皆々で共に祈ってきました。自分ひとりのことではなく、世の中から「悪しきもの」を祓ひ浄めて、穏やかな人々みなんなの暮らしが戻ることを願ってきました。

このやうに、世の中全般の平安を希求する「いのり」を、皆で一緒に祈り合うことがあってこそ、「まつり」の真の姿が実現できるのだと思ひます。

「天下泰平・萬民和楽」といった文字が書かれた幟が昔の祭礼には掲げられたりしました。

これを現代風に言い換へれば、完璧な世界の平和と差別無き人類の幸福とでもいへます。賑やかな「まつり」を通してこの大きな「いのり」の実現への歩みを進めることこそが、「まつり」の本質的な意味であり、そのための賑やかさが不可欠なのです。

令和五年度祭事曆

- 一月 一日 歳旦祭
鶏鳴神事
- 二月 二三日 天長祭
- 三月 二一日 春季大祭
- 祈年祭・合祀神例祭
- 四月 二九日 昭和祭
- 五月 十五日 例大祭
神社本廳献幣使参向
琵琶島弁天社へ神輿渡御
- 六月 三〇日 大祓式
- 大祓人形納め・茅の輪神事
- 七月 九日 天王祭出御祭
本社神輿御霊入・宮出渡御
- 七月 二一日 三つ目神楽
- 無形文化財湯立て神楽
- 七月 一六日 天王祭巡幸祭
天王神輿町内巡幸
- 七月 二三日 手子神社例祭
- 九月 一日 浅間神社例祭
- 九月 一七日 熊野神社例祭
無形文化財湯立て神楽
- 一〇月 一五日 手子神社秋祭
無形文化財湯立て神楽
- 一一月 二三日 秋季大祭
新嘗祭
- 一二月 八日 歳の市
開運熊手授与
- 一二月 三一日 大祓式
大祓人形納め
- 毎月 一日 月次祭

琵琶嶋でのアマモ場再生活動

無垢塩草について

琵琶嶋（弁天島）前の海域で、アマモ場再生の活動が続けられてきました。

瀬戸神社の夏祭りは「天王祭」といって、御祭神を御神輿に奉安して町内を巡りますが、この神輿に御霊をお遷しするときには、琵琶嶋前の海からアマモを採取して、これを神輿の四方の蔵手に取り付ける習はしがあったと古老の伝承にありました。

「無垢塩草」といって「祓ひ」の意味のある海藻だったのです。アマモ場再生活動に併せて、この行事も復活するべく取り組んでいきます。

地域の文化伝統の護持や復活と自然環境の保護・育成とは表裏一体の活動となっていてこそ実現



できるものであることを、このことは示してあります。

世界的な課題となつてゐる炭素の固定化には、山林の緑の保全だけではなく、私たち周辺の里海の保全もつよく叫ばれるやうになつてきました。

今後このアマモ場再生に注目してゆきたいと思いますが、今回はこの活動について、代表を務められてこられた横浜市立大学の塩田肇先生にご寄稿をお願いしましたので、是非、ご参照ください。

金沢湾のアマモ場再生活動

多様な生き物が暮らす豊かな海、その狙い手としてアマモ場



（あまもば）があります。しかし、産業活動の影響でその多くが失われました。失われたアマモ場を蘇らせるため、さまざまな立場の人びとが協働してアマモ場再生活動を進めてきました。

アマモは浅い砂地の海底に生える植物（海藻・うみくさ）です。アマモの群落であるアマモ場は、小魚やエビ、巻貝などの生活と繁殖の場となります。そのため、アマモ場は、「海のゆりかご」とも呼ばれ、生態系や水産業において重要な存在です。

また、アマモ場は光合成能力も高く、最近ではブルーカーボン（海での二酸化炭素削減）の主役としても注目されています。

かつて日本の沿岸には豊かなアマモ場が広がっていました。

しかし、高度経済成長期に埋め立てや水質汚染が進んだ結果、アマモ場は激減しました。アマモ場が減少すると、そこに暮らす生き物も姿を見せなくなりました。金沢湾も例にもれませんでした。

そこで、平成13年にボランティアアダイバーの団体が中心となつて、金沢区の野島でアマモの移植が始まりました。平成15年には、行政、企業、研究機関、学校、市民などによる協働事業組織として

朝比奈町鎮座

熊野神社

社伝によれば、鎌倉に幕府を開いた源頼朝が、その東北の守りとして熊野三社をここに勧請したものとひまます。仁治二年（一二四一）、鎌倉幕府は朝比奈切通しの開鑿に全力を挙げ、執権北條泰時は自ら現場に臨んで工事を指揮しました。社殿の建立もこの頃行はれたこととせう。

その後、元禄八年（一六九五）、地頭加藤太郎左衛門尉良勝が神殿を再建してから、里人の崇敬を集め、相模国鎌倉郡峠村の鎮守として崇敬されてきました。安永及び嘉永年間には再度の修築も行はれて、明治六年村社に列しました。

昭和五十三年、氏子一同の熱意を結集して、入母屋造、総檜、銅板葺きの本殿を完成し、さらに平成御大典記念事業として新たな拜殿を建築竣功して今日に至つてあります。

御祭神は速玉男命、伊邪那岐命、伊邪那美命の三柱です。

例祭日は九月十七日で、昔ながらの古式にのつとつた湯立神楽が今も続けられています。

「金沢八景―東京湾アマモ場再生会議」が編成されました。メンバーがボランティアとして活動を支え、野島や海の公園でアマモ場を再生してきました。

アマモ場再生活動の一年は、6月に花枝採取から始まります。

海の公園で採取した花枝を網袋に入れて、横浜市漁業協同組合柴漁港で種子を成熟させます。

7月下旬に網袋を取り上げて種子を選別します。11月に苗床を作り種子を蒔きます。苗床を柴漁港内の大型水槽に沈めて、4月下旬まで苗を育成します。

20から40センチメートルに生育した苗を海底に直接、あるいは、海底に設置したプランターに移植します。

このような作業を子どもたち、学生、市民、企業など多様な立場の参加者が、各回に50から100人集まって実施しています。

最近では、漁業協同組合や企業が主体となった企画も進められるようになってきました。

野島と海の公園では、平成20年までに当初の二千倍にあたる5ヘクタールのアマモ場が再生されました。

アマモ場が復活すると、生き物の種数・数とも増加し、地域の漁業者からも高く評価されました。

猛暑や台風の影響でアマモ場が衰退したこともありましたが、数年で元の状態に戻りました。環境の変化にも耐えられるアマモ場が再生できたと考えています。

再生されたアマモ場を活用して、小学生の環境学習会を開催してきました。学習会では、生き物観察、海の生き物カルタ、アマモ場紙芝居、赤潮の実験などを行っています。

地域の小学校でも、アマモや海の生き物を取り上げた学習が継続されています。海の環境に関心をもつ子どもたちが育つことで、海の環境を長い目で見守っていきます。

アマモは古来より人びととの結びつきが深い植物で、各地でアマモを用いた神事が知られています。瀬戸神社でも、再生されたアマモが神事に利用されています。

平成23年より、琵琶島でのアマモの移植に取り組んでいます。湾奥の厳しい環境ではアマモが一年を通して生育するのは困難です。現地の環境を調査しながら、さまざまな実験に取り組んでいます。

金沢湾でのアマモ場再生は短い期間で一定の成果が得られま

した。これは活動に参加・協力していただいたすべてのみなさんの成果です。

再生したアマモ場の安定性を確かめるため、継続した観察が必要。そのためにも、地域に根ざした活動となることを願っています。

(金沢八景―東京湾アマモ場再生会議 代表・塩田肇)

写真左：海の公園での花枝採取
前頁：琵琶嶋での移植作業



谷津町鎮座 浅間神社

谷津の町の鎮守として古来崇敬されてきました。伝説では御堂関白太政大臣藤原道長が当地に來遊し、能見堂から金沢の景勝を鑑賞したときに、正面の目の下にあるこんもりとした山を塗桶山と名付け、そこに浅間大神を勧請したといはれます。道長の来訪は史実ではありませんので、創建の詳細な時期は不明ですが、富士山信仰が関東一円に広まった中で当地にも勧請されたものでせう。ご祭神は富士山の浅間神社と同じ木花之佐久夜毘賣命です。特に安産の御利益があり婦人の崇敬が篤かったと伝へます。御祭神が天孫瓊瓊杵尊の御后となり、御子神等を出産されたことによるものでせう。

祭礼は六月一日の開山祭と九月一日の例祭。例祭(近くの土日曜)には谷津・東谷津・泥亀の各町内で神輿の巡幸その他のにぎやかな行事が営まれます。寛正四年(一四六三)西山松眠といふ医師が神饌田を奉納、以来、例祭には赤飯をお供へし、お下がりには崇敬者婦人が分けあったといふことです。

瀬戸神社略縁起

大昔、今の泥亀町、大川町、釜利谷町小泉のあたりまで海が入りこみ、柳町や六浦町の塩場、南六浦、内川町内もすべて海でした。そして洲崎と瀬戸の間は、潮の干満時には急流が渦を巻き、容易に渡れぬ難所でした。古代人がここに海神を祀ったのが瀬戸神社の起源で、今から千五百年以上も前(古墳時代)のことです。

治承四年(一一八〇)鎌倉に入った源頼朝が、日頃崇敬する伊豆三島明神をこの靈域に遷祀してからは、六浦港の守り神「瀬戸三島大明神」として鎌倉幕府をはじめ上下の尊信をあつめ、その後、足利氏、小田原北条氏の崇敬も篤く、江戸時代には名勝金沢八景の中心にあつて、百石の社領を有する大社として、江戸の町民の間にも信仰者がひろがりました。

明治六年郷社に列格、戦後は宗教法人となり神奈川県神社廳獻幣使参向神社に指定。現在の社殿は寛政十二年の建造で、昭和四年の屋根を銅葺きに改め、平成二十四年には御屋根替へと修増築の御修宮事業が行われました。社務所(淑月館)は令和大禮記念事業として令和二年三月に竣功しました。

御祭神

大山祇(おほやまつみ)の命

伊豆国三島大社、伊予国大三島の大山祇神社の御祭神と同じ海上交通の神であると同時に、水源地を司る山の神であり、金属、岩石、木材などの建築資材や、森林、鳥獣に至るまで、一切の生活資源は、この大神の恩徳によるものです。

天孫瓊瓊杵尊の御后となられた木花咲耶姫の御父神にあられます。

須佐之男(すさのを)の命

配祀の神の須佐之男命は、天照大神の御弟神で、八俣の大蛇を退治された神話は有名です。自然界、人間界の罪けがれや悪者を追い祓ひ、人々の苦しみを除いてお守りくださる神様で、別名を「天王さま」と仰がれておます。七月の天王祭りには大神輿で氏子町内をくまなく御巡りになります。

菅原朝臣道真公

天満大自在天神とも尊称し、一般には「天神さま」と親しまれて呼ばれます。書道、学問、詩文、和歌に秀でてをられただけでなく、至誠、尽忠、孝道、正義、国家鎮護の神さまでもいらっしゃいます。

むくしおくさおはらい 無垢塩草御祓しやくし

瀬戸神社の夏祭りである天王祭りに際しては、平潟湾から無垢塩草(あまも)を刈り取り、これを神輿の蔵手に取り付けてお清めをする行事が伝承されてきました。海のゆりかごと称される無垢塩草(あまも)は、大きな祓への力をもつものとされます。

また、天王祭三つ目神楽で使用される「御祓」の御幣といふ鎌倉神楽由来の靈験の御幣に、この無垢塩草を併せて「瀬戸際のすくい」の祈りを込めた竹杓に結び、さらにご神威のこもった「牛王宝印」の用紙で包み、皆様のご自身・ご家庭等の安全平穩を祈念する祓申として授与させていただきます。

(お初穂料壹千五百円)



瀬戸神社 (〒三三六-〇〇二七)

横浜市金沢区瀬戸十八-十四

(電話) 〇四五-七〇-一一九九九二

(FAX) 〇四五-七〇-一一九九九四

<http://www.setojinja.or.jp>

釜利谷町鎮座

手子神社

釜利谷町総鎮守の手子神社は、もとの地の領主伊丹左京亮が、文明五年(一四七三)瀬戸神社の御分霊を宮ヶ谷の地におまつりしたものです。

延宝七年(一六八〇)、伊丹氏の子孫、三河守昌家の子で、江戸浅草寺の智樂院忠蓮僧正が、現在地に遷祀して以来、釜利谷一郷の総鎮守として信仰をあつめて来ました。

明治六年村社に列格、大正十二年の大震災で倒壊しましたが、同十五年再建し、昭和四十五年には御屋根も総銅板葺きに改修し、一段と御神威を加へました。

御祭神は瀬戸神社と同じく大山祇命、例祭日は七月十七日(現在はその後の日曜日)ですが、十月十五日(前後の日曜日)の秋祭りには、古式豊かな湯立神楽が昔ながらの伝統を守って行はれます。

境内の洞窟にお祀りする竹生島弁才天は、金沢八景のひとつ「小泉の夜雨」の中心地にあつたもので、厄除け、開運の福神として信仰されておます。